

釣りに釣られて

高原英夫

第二十三回 「馬淵川（その一）」 トンネルを抜けると

まだ八戸までも新幹線が来ていない頃、仕事で東京や仙台に向かう時は青森から特急に乗り込みまず盛岡へ向かった。その時は決まって進路方向の右側に座席をとった。やがて八戸を過ぎ三戸駅を過ぎ、二つトンネルを抜けるとすぐ無人駅の時駅が見えて、その瞬間鉄橋を渡る。その右側の車窓の下に緑色に満々と水を湛えて、たおやかに流れる馬淵川が見える。それはまた岩手県との境でもある。「あっ、発電所だ」「その向こうが遊んだ場所だ」と一瞬の内に小学生の頃の情景が浮かび、また長いトンネルに列車は入っていく。もちろんその風景の中に私の実家もしつかりと見えていた。

「ミッツ」は数を数える時の「ツ」を下げ調子に言えば光男の呼び名だった。そしてヒサシと私の三人は、青森県に入り一番最初となるトンネルの前の壁にへばり付き、列車が通り過ぎるのを待っていた。三人は、小学四年の同級生だった。

蒸気機関車はもくもくと石炭を焚いてトンネルに入っていく。その煙は甘く、胸いっぱい吸い込んでみたい誘惑に駆られた。列車はほんの数分でトンネルを抜けていく。しばらくの間は煙で中はなんにも見えない。やっと出口がぼんやりと見えたら突入だ。トンネルの向こうへ抜けようということなのだ

腕時計など持たない三人、ましてや時刻表など見ることもないまま、ともかく今行ったばかりの線路には、すぐまた列車は来ないという誰が言ったでもない確信があった。それでもヒサシは線路に耳を押し当て、「音がしない」と安全を決めつけた。線路は単線なのだ。誰も怯える様子は見せない。

「行くべ」

ひとりは左手に長い棒を持ち、トンネルの壁に当てカラカラと音を立てながら入っていく。入り口の高さは十数メートルはあるのだろうか、ただし出口は小指の爪ほどもない大きさで、煙が残り薄茶色に見える。かすかな出口からの光が何か冒険の始まりにふさわしい不安とも同居していて、恐る恐る、しかしワクワクとして前へ前へと歩を進めた。当時、誰が言ったのかトンネルは半里あるといわれている

た。実際のところは知つていても意味などないし、ただ何分歩けば抜けられるかの時間だけが問題で、一刻も早く通り抜けたいだけなのだ。

月明かりの晩に母に届け物の用事を言いつけられて、夜道を走ったことがあった。ところが、舗装も街灯もない田舎道で、石ころがいくつも転がり凸凹だらけなのが、気にもならず、なぜかいくらでも早く走れる気がした。足許が見えない分だけ、体が宙に浮いた感じで、月に照らされた柔らかな周りの風景が後ろに飛んでいった。

トンネルは中ほどまでくると真暗で、前も後もほんのわずかの光が見えているだけだ。闇の中で居所を失った感覚に襲われ誰からともなく走り出した。ただ全速力とはいかなかった。それでも月夜の道を走った時のあの感じがあり、早く抜け出たという気持ちと重なり、足だけは軽快に走れている気になっていた。

あと何分走ればいいのか知る術もないのだが、前からの光が少しずつ少しずつ大きくなる。そして、それがはつきりとその大きさを確実に現した時、息をつかず潜

り続け、やっと水面に顔を出し息を吸い込んだ時のような安堵感に、三人は立ち止まった。

「ハア、ハア」と腰をかがめ、両膝に手を置いて、

「あと、わんつかだ（あとすこしだ）」

と顔を見合わせた。だから何をしたくてということではなく、これから行く川のほとりに向かう為に、そこにトンネルがあるから、そして三人の度胸の確かめ合いとしかいいようのない行為なのだった。

トンネルを抜けて右側の小径を降りて行くと川遊びの場所となる目的地はすぐなのだが、さらに三人は続いてすぐにある鉄橋を渡るのである。下が透けて見える鉄製の格子の綱の通路の上は、足を進める度に「ガッツン、ガッツン」と大きな音が響く。その鉄橋の下にはやはり馬淵川が流れていた。川面までは何十メートルもあるような高さで、足が竦み、なかなか前に出ない。三人は互いに顔を見合わせながら、それぞれの眼の奥底に恐怖があることを確かめ合い、しかしそれは言わず、

「ガ（お前）が進んだらワも」

と、やつとの思いで向こう側へたどり着いた。そのすぐにまたトンネルがある。山間を結ぶ、それはそれは高く空に浮かぶ鉄橋だった。

鉄橋を渡ることは何の目的も持たない単なる遊びでしかなかった。すぐまたそこを戻るのだから。要するに目的地はトンネルを抜けた右下にあるのだ。そしてまたゆつくりと鉄の音を響かせ戻る。そこにスリル満点の遊び道具である鉄橋があるのだ。だから渡ってみる。単純明快だった。

そして小径を川まで降りるのだが、そこにはそのようにしてまでも行きたい川の様子があった。川底の岩盤が水でえぐられ、あちこちが丸いプールのようになっていた。淀みがゆつたりと青空を写している。釣りをするにも、泳ぎをするにも、川に小石を投げて水切りをしてみても、川の流れのように時は静かに流れていた。何時間いて、何匹釣って帰るとかではなく、ただそこにいること自体がもうたまらなかった。水中メガネで見えた魚が大きかったとか、釣ったからといって食べるわけでもなく、その場所へはそう簡単には行けない、しかしとてつもなくいい川辺で三人の声だけが山の間を響き合う。時折、列車が大きな音をたてて鉄橋を通り過ぎて

いく。そしてまた川のせせらぎだけの静寂に戻る。そこに三人が遊んでいる、そのことが楽しかった。今思えば桃源郷にでもいるような。

数時間を過ごし、さあ帰ろうとなると、実は、もう一本小径があり、そこを登っていくと、同級生の女の子の家の前にある畑の脇に出た。何のことはない。そこを通れば、トンネルも鉄橋も通らず何の恐い思いをすることもなく行き着くことができたのだ。

でもやはり、あの場所へ行く時の道は絶対にトンネルを抜けて行かなければならないのだった。

その女の子の家は集落から二十分ほど歩いた山の中腹にあり、当時は車など無くひたすら歩くだけなので、とても遠くに住んでいる子だと思っていた。その子はおとなしく、運動会ではいつもビリを走っていた。しかし利発で、笑顔はいつもあの川のように優しかった。

平成23年10月